

Title	唐中期の浄土教特に法照禪師の研究(塚本善隆著)(東方文化學院京都研究所研究報 第四冊)
Sub Title	
Author	太田, 達雄(Ota, Tatsuo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1934
Jtitle	史学 Vol.13, No.1 (1934. 4) ,p.171- 174
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19340400-0171

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

唐中期の淨土教

特に法照禪師の研究（塚本善隆著）

（東方文化學院京都研究所研究報 第四冊）

かの英國のスタイン氏、佛國のペリオ氏等によりて將來せられし、燉煌古文書中にも法照禪師の著述及びその事蹟を讚仰せし幾多の古文書を見るのであるが、かくの如く遠く唐宋時代の燉煌の佛教徒にも讚仰せられし法照は、唐の中葉、代宗（七六二—七六九）、徳宗（七六九—七八〇）の長安文化爛熟時代に、主として五臺山、太原（山西以上）及び長安（西）地方に彌陀念佛教を宣揚し、支那淨土教傳道史上に、唐の道綽、善導に比すべき成績をあげし人である。日本の淨土教は法然上人以來支那の曇鸞、道綽、善導の諸師殊に善導を以て教義上の指導者となして特異の發展をとげたりと雖も、念佛教の成長普及の上には、鎌倉時代以前にも以後にも、法照淨土教に負ふ所少からず。されど善導以後の支那淨土教の研究は閑却され勝ちにして、法照淨土教の如きも、未だ十分に明かにされ居らざる一例にあげ得るものである。本稿はかゝる法照の傳記、教義の性質、系統並にその影響を研究し、以て支那佛教史上、淨土教史上に於ける法照教の意義を論じ、供せて唐中期の淨土教殊に帝都を中心とせる淨土教の大勢を明かにせんとするものである」（三頁）とその編著の主旨を述べられてゐるがそれは又根本佛教とも、印度佛教とも著しく變化したる支那佛教の事實を研究するもの、即ち「支那人法照の宗教」をありのままに究明せんとするにあると斷られ

てゐる。從來支那佛教は支那國民の宗教としてよりは、寧ろ一部僧侶の教學、即ち思辨研究の繼承發展として取扱はれて來たかの感があるが、著者はこの點を排して佛教を實際支那社會に行はれし宗教として考察することの必要を認め、殊に哲學的思辨的傾向の強き學派的佛教に比し、極めて簡單なる教義の下に實踐を主とする淨土教の研究にその必要多しと主張されてゐる。従つて支那淨土教盛行の時代殊に法照時代の社會文化諸相の論述に多くの紙數を費されてゐる。

唐は代宗の永泰（七六五—七六六）、大曆（七六六—七七八）の時代に入り、安氏の大亂に平和緒につき所謂「土木之妖」なる巨資を投ずる豪壯華麗な建築の競争は天寶の盛時復現を示す一例であつた。従つて佛教もまた復興し、その三世因果應報の信仰と、それに必然付帶する修功德の思想の顯現が盛なる造寺、造像、法要儀式となつた。代宗徳宗時代長安佛教の中心となつた章敬寺は宦官魚朝思によりて大曆二年章敬皇太后（代宗の母）追福の爲に建立され、法照はこの寺の淨土院を五會念佛教宣揚の根據地とした。又かの有名なる五臺山金閣寺の建立もこの時代であつて、法照は全盛期の五大山をその活動の舞臺とした。我が圓仁慈覺大師は創立後七十餘年に親しくこの金閣を参拜した人である。次いで徳宗も又佛教を尊崇したのであるが、要するにこの大曆、貞元の長安佛教は權勢階級の保護による貴族的佛教であると共に、廣く社會に一般化し、常識化せる庶民的佛教でもあつた。かゝる時代社會には哲學的宗教よりは寧ろ神祕靈驗を説き、簡明なる教旨實踐をもち、法要儀式を盛にする宗教の歡迎せらるゝことは當然であつて、法照の淨土教は實に

これらの性質を最も具有するもの即ち大曆、貞元の社會に最も迎へられ易きものであつた(五〇頁)。次いで著者は代宗徳宗時代の佛教諸宗派を概観し當時長安佛教界の王座を占めてゐた不空(密經の大成者)の宗教と淨土教との關係、及び荆溪湛然が天台宗中興の大業を完成せし時代は恰も法照と同時代であり、従つて法照の淨土教は密經の影響に依りて神祕靈驗の連續の上に立つと共に、禪、天台、念佛教との融合雙修の主張が伺はれると(七九頁)なし、要するに大曆、貞元の佛教は實に盛なりと雖も「南北朝唐初の佛教の研究思索に於ける純正深刻、實踐修道に於ける純一熱心は概して薄らぎ、綜合協調の風潮の裏に教義の類集化、註釋化、形式化を見、實踐修道の形式化、遊戯化さへも見うけるに至つた」(八〇頁)と云ひ更らに「佛教も亦唐文化の爛熟から廢頽への時勢より離れて存し得ざるの感を深からしめるものが大曆貞元の佛教である」(八〇頁)と結ばれるは前述の如き著者の佛教と社會文化諸相との相關關係よりする研究態度の一半を伺ひうるものである。

次いで第四章に至り著者の眼目とする「淨土教の發達普及」に論及され、隋より唐初に互りて二種の淨土即ち彌勒淨土と彌陀淨土との論難あり大體に於て彌陀淨土の勝利に歸し、法照淨土教は、この彌陀淨土教發達普及の頂點に出でたものである。これより先き淨土教は曇鸞、道綽を経て善導に至りて大成されたのであるが、善導淨土教の主旨は「末法凡夫救済を本願とする阿彌陀佛への罪惡凡人たる吾人の至心歸命、この聖凡兩者の感應が罪惡凡人の念佛行と彌陀本願との順應によりて成立し、救済が確立すること、

この順彼佛願の念佛修行による淨土往生教こそ「現今及び未來一切衆生を救済する適時、適處、適人の宗教であるとする所に善導教義の詮要が存し、従前の淨土教に對する特長が存するのである」(九五頁)

扱て今此に論ぜんとする代宗徳宗時代の法照淨土教は前述の諸師によつて淨土教の普及せし時代に出で、これらの諸師の行蹟に私淑し略同様な教旨を繼承して、唯新稱名念佛法による神聖なる儀式を創唱したものに外ならぬ。

かゝる法照の傳記研究資料としては「宋高僧傳、卷二十一、感通篇、唐五臺山竹林寺法照傳。」「廣清涼傳卷中、法照和尚入化竹林寺。」を挙げ特に後者が史料として重ぜらるべきを證し、前二書と系統を異にする「往生西方略傳。」「寶刻類編」所載「章敬寺法照和上塔銘、鏡霜述並書」を以て五會法事讚の撰者法照の塔銘と推定し、彼の長安に於ける活動を暗示する貴重資料となし、法照の師、南嶽承遠に關する碑文、即ち「唐、呂溫撰、南嶽大師、遠塔銘記」(因和叔文集卷六文苑)、「唐、柳宗元撰、南嶽彌陀和上碑」(柳河東集卷六)及び法照の著書、「淨土五會念佛誦經觀行儀三卷」(上卷)〔ベリオ氏將來續集、(缺)本、大正藏經八五〕、「淨土五會念佛略法事儀讚一卷」(大正藏經、八四七)〔並に圓仁「入唐求法巡禮行記四卷」等を舉げて検討されてゐる(第五章)〕。

次に法照の傳記を要約すれば

1 法照は恐らくその師承遠と同じく漢州(四川)地方の人なるべし

2 法照は出家後、東吳地方に遊び、更に慧遠の芳躅を慕ひて廬山に入りて念佛三昧を修し、更に永泰年中(恐らく元年七六五)南嶽の專修

念佛行者承遠を訪ねてその門に投ぜり。但し法照の淨土教は承遠師事以前より、少くとも揚子江下流南岸地方に修學求道せし頃より成長しつゝありしなり

3 永泰二年四月以來、毎年夏九十日間、般舟念佛三昧を修すべきことを誓願し、以來大曆四年(七六九)まで南嶽、或ひは衡州の地方にありて淨土業に専心精進し、この間五會念佛法なる音樂的唱名法を創む、蓋し無量壽經の「極樂の水鳥、樹林が五會の音聲を出す」との經説に根據をおくものにして、彼はこの法を靈感中に阿彌陀佛より親授せる「現今末代衆生」に最も功德廣大なるものなりとせり

4 この間、文殊菩薩現住の靈地と信ぜられし五臺山巡禮を發願し、終に大曆四年夏季の念佛三昧終了後、同志若干名と五臺山に向ひ、大曆五年四月五臺山に達し、佛光寺、華嚴寺等に住す。大曆五年六年の間、五臺山にて屢々靈感に接し、益々彼の念佛教が、時代適應の宗教として、弘傳に努むべきものなることを確信するに至れり。

5 大曆九年前後には、北京并州(太原)地方に出で、五會念佛教を弘め、五會念佛誦經觀行儀三卷を撰述す

6 大曆十二年五臺山に在り、當時既に若干の歸依隨從者ありしものゝ如し

7 大曆末年の頃より帝都長安に出で朝廷よりも尊敬歸依をうけ、新建の大寺章敬寺に屬して、その淨土念佛教を弘傳す、また師南嶽承遠の德風顯彰につとむ。法照の著、五會、念佛略法事儀讚は、大曆九年以後の帝都章敬寺の淨土院にて述作せられ

しものなり

8 貞元の頃五臺山に竹林寺を創建す。竹林寺は五臺山に於ける新建寺院として有力なる地位を占めたり

9 出生並に示寂年代不明なれども、淨土教傳道者としての活動は、大曆、貞元中に在り(三〇二頁)

次いで著者は法照の著述としては、圓仁によりて將來され獨り我國にて廣く行はれし「淨土五會念佛略法事儀讚一卷」の外は支那に於ては夙に散逸して傳はらなかつたが、同書に云ふ「五會法事儀三卷」なるものは燉煌の古寫本中に見ゆる「淨土五會念佛誦經觀行儀」(上巻中、下巻在)に相當するものであらうと斷ぜられた(以上第七章)。

終りに著者は法照淨土教と日本淨土教との關係に言及され、平安朝時代京都を中心とせる念佛教普及流行の重要な原因をなし、又中心となりしものが比叡山常行堂に實行さるゝに至りし圓仁傳來の五臺山念佛即ち法照念佛教にあること、又この比叡山常行堂念佛が京都を中心として殆んど全國に流行し行けることを論じ「法然上人の念佛宗開創は全く善導の著述に依つたものである。然れども常行堂念佛を中心とせる念佛教の普及流行なくしては、法然上人の念佛宗開創も現はれなかつたであらう。假令念佛宗の開創ありしとするも、直ちにあれほどの響應者は出でなかつたであらう。(中略)然らば法照念佛教は、日本淨土宗開創にも重要な基礎工事となつてゐる」(三四三頁)と述べられ、更らに親鸞上人もその著教行信證に五會法事讚を引用せるのみならず、上人手澤五會法事讚略抄本が見出されてゐる。然れば、日本の淨土宗は圓仁

によつて傳へられし五臺山念佛敎の普及の後に夙に傳はり居りし善導の著述が、敎義組織の指導として、新に法然上人等によつて研究され、此に淨土宗義組織開創となつたのである。「然らば日本の念佛敎は唐の史實を逆に、先づ法照念佛敎によりて開拓せられ、次で善導淨土敎によつて組織大成せられたものと云ふべきである」(三四八頁)と結論されてゐる。

以上にて大體の内容を紹介し終りたのであるが、著者が異常なる勢力を以て善導以後の支那淨土敎の暗黒面に多大の光明を投ぜられたことは、獨り支那佛敎史、日本佛敎史研究者のみならず、我々東洋史研究者の者、殊に唐代文化史研究者を益すること大なりと云ふべきである。我々は著者が如此研究態度を以て、支那淨土敎のみならず、支那佛敎史全般に亘りて、その研究を大成されんことを希望して止まない。(昭和九年二月十日、太田達雄)

本邦 俠客の研究 (尾形鶴吉著 博芳社發行)

戰國時代に於ける殺伐輕死の傾向は、徳川氏の世となりし後も止まらず、質素、剛勇、廉耻といふが如き、善き半面の存在すると共に、殺伐慘酷なる弊害も少くなかつた。武を尊び義に勇むの極、却つて秩序と平和とに對する反抗として現はれ、職業的に或は非職業的に、俠的行爲を演出し、諾を重んじ、弱きを扶け強きを挫くを主義とせる、所謂「俠客」に對する從來の研究は、吾人の満足し得る所まで到達して居らぬ。かゝる際、俠客の發生、轉化、存在を語る全貌史であり、他面徳川封建社會崩壞過程を摘出

せる、考證史として、「本邦俠客の研究」を、宮内省圖書寮囑託にして目下有職の調査に従事中の尾形鶴吉氏に依りて、刊行せられし事は、欣快に堪ぬ事である。

「俠客」なる語は、彼等が江戸時代に於ける、庶民階級進出の最先驅者として、社會史上不滅の足跡を留め、あまねく民衆に依り喧傳せられ、且つ讚仰せられしにかゝらず、從來史的研究對象としてはやや等閑視せられし問題に付き、種々なる觀點に立ちて試問し、檢證し、俠客の存在現象を、常に動的史觀の展開を信條として著述せられしものにして、こは本書の生命とする所である。かゝる課題を擇ばれし動機に關し、著者は次の如く其の緒言の中に於て述べて居られる。

「從來彼等に對して與へられた諸々の史的**研究**は、自分にとつては少くとも二つの點に不滿を感じさせられたのであつた。即ち其一つは、彼等の個別的行為に就いては、細心至らざるなきまでに鼓吹されて居るが、彼等の培養素地であり、普汎的契機とも稱すべき當代社會への關心が、等閑に附されて居た觀がある事である。云ふまでもなく、歴史の生命は、個別事象と全體事象との相關的動的發展過程の迹付にある筈である。此理を忘却しては、如何にしても、複雑なる關係の下に織られた俠客史への徹見は、屬望し得ない。他の一つは、其が餘りにも、社會機構の主要體なる下層庶民の歴史を等閑視して彼等活動の業績を抹消し、上層階級の歴史へ媚態を呈した事である。茲に於て自分は、斯る史觀を排し、本邦俠客史上の代表的本流たる三大都——江戸、大阪、京都——を始めとし、其他、地方城下町、或は僻陬の地域に活躍した有名